
傷迷子とただの少年

仙國 恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷迷子とただの少年

【Nコード】

N2188Y

【作者名】

仙國 恭介

【あらすじ】

僕は美術の作品「抽象物」の作成にあたり、報恩神社にきていた。そこで植物採取及び材料調達をしていた僕はより綺麗な材料を探すべく境内の上、本堂まで石階段を登っていった。そこにいたのは女の子・・・女性だった。彼女全身に傷を負った『迷子』だった。そんな迷子と僕の生活はとも「普通」だった。この世界にSFもファンタジー要素もない。僕はヒーローにはなれないただのモブキャラ。その他のキャラ。僕たちの生活は「普通」だ。だけど、「関係」は異常だった・・・。

1- (1) 報恩神社

僕は今から彼女との過去について話す。

この話にファンタジー、SFの類は含まれない。

それでもいいと言うのなら、この話を最後まで聞いて欲しい。

これはどこまでも自分の勝手な主張で、個人の思い出で、意味も価値もない話だ。

それでもいいと言うのなら、この話を存分に楽しんで欲しい。

いや、

存分に悲しんでくれ。哀れんでくれ。蔑んでくれ。

それでやっとな僕は罪悪感を受け入れて、生きていける。

もう、疲れたんだよ。

そろそろ、僕もこの過去から離れたいと思っていたところだし。

まあ、すでに過去は僕の生活に組み込まれているんだけど。

それでも。

僕は、この惨めな僕は、過去を清算したいと思っているんだ。

報恩神社

僕はただの中学生だ。至って普通で、どこにでもいる中学生だ。

サッカーをやっている。・・・もともと夏の大会の1回戦で負けて受験勉強に毎日勤しむただの中学生だ。

そんな僕は、成績が良かった。

ら、良かったのにな。

成績は中の上の下だ。二〇〇人中80番ぐらいの順位を誇ってい

る。誇れる点数じゃないけど。

そんな僕は美術の授業で使う材料を集めにここ報恩神社に来ていた。この報恩神社は「ほうおんじんじゃ」と読むのだけれど、感謝という意味らしい。縁起の良さそうなこの神社で材料採取をすべく、僕はあぜ道を通って神社の裏に自転車を駐めた。この神社は山と連なっていて、裏に駐めたというより、隅に駐めたと言った方が適切かもしれない。

美術の授業内容は『抽象物を創る』という訳の分からないもので、一つのテーマに沿って『抽象的な物』を創らなければならないらしい。一体先生はどうやって評価をするのだろうか？ そんな疑問が浮上した時僕は、『材料』だと思った。抽象的なものを評価するのはとても難しいと思う。だったら、評価されるべき点は「やる気」と「材料」だ。

と、言う訳で僕はこの雨空の中ここに来ていた訳だ。

なぜ雨空の中傘も差さずここに来ているのか。

雨に打たれるのが好きだから。

・・・恥ずかしいが、そういうことだ。

雨に打たれる喜びを感じる変人なのだ、僕は。気にしないで欲しい。気にされたら泣いてしまう。

そんな僕に友達と呼べる代物はいない。・・・友達を代物扱いしている時点で友達もくそもないか。

まあ、とにかくここ報恩神社で植物採取をするのだけれど、主に「秋」をテーマにしている。だから、秋景色真っ直中の神社でどنگりや紅葉を集めている。

階段の下の方には、僕が目的としている「綺麗な色」の紅葉は見当たらなかった。

だから僕は、境内の階段を登って、より山深い本堂のへと足を進めていった。階段は雨で滑りやすくなっていて、落ち葉も落ちていたので、中々バランスと集中力を要するイベントとなった。

僕は辺りの秋景色を楽しみながら、「今日は晩ご飯作ってくれ

かな」と考えていた。

本堂が近くなってきた、「やっと階段が終わる」と小言を呟き、もう一步、最後の段差を上がろうとして僕は停止した。

段の上に蛇がいた訳でも無かったし、蜂がいた訳でも無かったが、女の子がいた。

賽銭箱の前で、女の子座りをしてこっちを見ている。

白のスカートを穿いている、女の子というより、「女性」と表記した方がただしのような女性だった。

彼女は僕の顔を数秒、ものの数秒眺めて、観察して、そして、にこりと笑うとこう言った。

「待ってたよ。お兄ちゃん」

先に断っておくが、僕は彼女のお兄ちゃんでも、知り合いでも、運命の人でもない、ただのそこら辺に転がっているモブキャラ表記のモブキャラだ。その他大勢で処理されるような人間だ。

だが、彼女は僕に微笑み、そして続けてこう言う。

「帰ろう。お兄ちゃん」

帰る？ どこに？

僕の理解の範疇を大きく飛び越えて彼女は話しを進めていく。そんな彼女のアナザーワールドに理解力及び、発想力に乏しい僕がついて行けるはずが無かった。

最後の段を踏み出せずに、彼女は女の子座りを崩さずに、彼女と僕は硬直状態を維持する。

僕は口を開かなかった。

考えてみてほしい。

知らないお嬢さん、お姉さんに声をかけられてこの僕が、人間不信のこの僕がついていくだろうか？ まず間違いなく皆無である。

というより、逃げだそうかと思っていた。今なら警察に通報しなくてもいい段階だし。

彼女は尚その微笑みを崩さずに淡々と坦々と話を進める。僕のことなど、僕の心情など意に介すつもりはないらしい。

雨は彼女と僕に降り注ぐ。

「・・・悪いんだけど、私ちょっと疲れちゃったからおんぶしてもられないかな？」

目の前で手を合わせ、ねだるようお願いしてくる不審人物。

僕が「はい、分かりました」などと言うと思っているのだろうか？
アイム、ニンゲンフシニング中の、現在進行形で人間不信の僕にそんな願いが通じると本気で思っているのだろうか？
・・・もつとも彼女は僕的心情など分かりはしないが。

どうしたものか・・・。

僕はこの状況を打破する糸口を考察するが一向に進展する機会が見当たらない。振り向いてさよならバイバイすればいいだけなのだが、僕はこの女性に『異常』を感じてしまった。

なんだろう。

ディズニーに向かう最中の子供の気持ち？ 新作ゲームの発売を待ちわびる気持ち？
・・・そういった期待感を抱いてしまっている。

さっきも言ったが、僕に友達と呼べる物体はいない。

だから、だからこそ、僕はこの女性に僕のつまらない日常をむちゃくちゃに壊してくれる期待感を抱いていたのかも知れない。

・・・後々むっちゃくちゃに壊れるのだけれど。

どうしたものか・・・。

一週回って結局始まりに戻ってしまった。

だが、今回の週は彼女がイベントを突っ込んだ。

「お兄ちゃん？ 大丈夫？ そこから動かないけど、何か危険なものがそこにあるの？ ……私が近づければ近づきたいけど、今足が動かないから行けないの」

彼女は罰が悪そうに、苦笑い……苦笑みを浮かべる。

僕はその時やっと、……今更気づいた。

彼女の足が傷だらけだということに。

靴は履いておらず、見える足の甲には泥と血がついていて、足の生傷が痛々しく僕に惨状を訴える。

「……これちょっと、痛めちゃって。だから、ね。その……」

彼女は言葉を濁すように切った。

僕は彼女の濁した言葉を追うことはなく、ただただ見ていた。それは彼女にとって「恥ずかしいこと」だったらしく、少々頬を赤め僕から視線を逸らした。

僕には「恥ずかしい」というより、「気持ち悪い」という印象しか与えなかったんだけど。

彼女の傷はどうもここへ来る途中についたらしい。傷跡や足の汚れからそう推測がつく。この本堂に上がるには二つのルートがあって、少々遠回りになるが坂道状になっている……Aルートとしておこるか。それに対し、Bルートは僕が通ってきた階段。もったも一般的に使用されるルートだった。

彼女は僕のことを再度見直すと、こう言った。

「お兄ちゃん。私シャワー浴びたいのですけど……」

さっきとは一転してこっちの方が人に頼むこととして恥ずかしいような気がしたが、彼女の思考ではこっちの方が普通らしい。

僕はその要望に、「はい。分かりました」と答えるはずがなかっ

た。先と同じになるが、現在進行形で人間不信の僕がそんなことを許す、というか聞き入れるはずがなかった。

普通におかしいだろそんなこと。

さて、どうしたものか。

僕は今現在彼女を完全に不信しているが、同時に彼女が「異常」だと言うことを信じさせられるような感じがした。・・・彼女の『現状』が「異常」だということかもしれない。

彼女の存在は僕にとって、つまらない日常をめっちゃくちやにしてくれる要因のような気がしてならなかった。

後々めっちゃくちやにしてくれるのだけど。

しかしながら、僕は当初の目的である植物採取をしなければならぬ、・・・そう、言うならば義務があったので、彼女に挨拶を済ませてこの場を後にしようと考えた。いくら初めてで訳の分からぬいことを言っていたとしても、一応僕と話をしていた人なのだ、別れの挨拶ぐらいしなければ人間としてどうかと思う。

と、いう訳で挨拶を述べようとしたのだが、彼女の方が一瞬早く僕より先に口を開いた。

「お兄ちゃん。私ね、迷子なの」

迷子？

迷子・・・

迷子。

道がわからなくなったり、連れにはぐれたりすること。また、その子供やその人。

「・・・そうですか」

僕はついに口を開いた。

というか、呆れて心の声が外に漏れだしてしまった。

確かに、大人であろうが、子供であろうが、賢者であろうが、愚者であろうが、誰であろうが、道の迷うことはあろうが、それでもここに迷いこむとは一体どういう見だ？

道が分からなければ交番にでも行けばいい。・・・などと“くだらない”想像をした後、僕は彼女の足を思い出した、見直した。

そう、動けない。

だったら、歩けない。

従って、訊くことなどできない。

・・・こともない。

携帯があるではないか？

至極まっとうな意見を出したと、僕は自分でも思ったが、同時に彼女はもしかして『何も持っていない』のではないかという疑問にもぶち当たった。

そこで僕は不審者にこう言った。

「僕の家まで送りましょうか？」

馬鹿だと思う。

人間不信をかつこよく言って、現代からかけ離れている存在だ、と決め込んでいた奴が早々に人間らしいことを言い出したのである。なぜかそう言った。

「よろしくお願いします。お兄ちゃん」

「・・・では、下まで行きましょうか」

なにが「では」だ。僕は一体何がしたかったのか、今でもよく分からない。

「あとう、私歩けない・・・」

「おんぶしますよ」

ここまで来たら訳が分からない。さっきまで全力で否定していたではないか。それが今では一変、「転」もいいところである。

僕はもしかしたら、『僕の現実』に新しい『被害者』を加えたかったのかもしれないと、思ったり思わなかったりする。

彼女は後に『加害者』になるのだけれど。

僕は彼女を自転車のある下まで運び出すべく、彼女の近くに寄った。つまり、ここに来てようやく本堂まで上がったことになる。

「どうやって担げばいいですか？」

これは女性に対して言う最も大切な言葉だったと、最も適切な言葉だったと僕は思っている。だって、不用意に担いで、変な言いがかりを付けられたらたまったものではない。

彼女とはいうと。

「おんぶで」

そうだった。

初めからおんぶと言っていたではないか。

僕はてっきり、お姫様抱っこの形か肩に担ぎあげる持ち方を想像していた。

「じゃあ、おんぶしますね。立てますか？」

「なんとか・・・ならないみたいです」

彼女は申し訳なさそうに僕に苦笑いを浮かべると、僕は仕方なく、

彼女の腰に手を回し、抱きかかえるように一旦起こす。そして、すぐさま彼女に背を向け僕の背中に倒れるように動く。

彼女が僕の背にのしかかってきた訳だが、予想以上に重かった。それは僕が女性という生物に淡い期待を乗せていたかもしれない。それなりの体重はあるのだ。

「・・・う」

「・・・重かったですか？ お兄ちゃん」

「そんなことはありませんよ」

僕は必死に言い繕う。それは女性を傷つけないために、僕が小説や漫画で習得した唯一とも言える武器だった。もちろんこれは女性だけではない。クラスメートにもそういったことができるまでに成長している。

さて、僕は彼女を担ぎ上げた訳だがそこで「気持ち悪い物」を見てしまった。

それは彼女の傷だらけの腕と手だ。

生傷が絶えず、腕の表面積の大部分を青あざが侵略し、左手の小指と中指の爪がはがれていた。そしてなにより印象強かったのが、右手に「何かを打ち付けられた跡があった」からだ。そう釘か何かで。

別に穴が空いている訳でも、出血している訳でもないが“跡”があるのだ。皮膚が破れないようぎりぎりまで釘を打ち込んだ跡が。それを僕は彼女に悟られないように横目で見るとすぐに足下の石の階段に目をやった。

「あゝ」

「!・・・どうしましたか」

僕は一瞬彼女の手を見ていたことがばれたかと思ったが、どうやらそう言うことではないらしい。彼女は僕の耳元で申し訳なさそうにこう呟いた。

「あっちに坂道があるのですけど、そっちを使った方がよかったんじゃないですか? お兄ちゃん」

「あっ・・・そうですね。うっかりしてました」

そうルートは二つある。階段と坂道。

僕はわざわざ難易度が高いルートを選んでしまった。というか、坂道を忘れていた。

もう階段を下りて一〇歩ぐらい進んでいるので、もう一回登ってやり直すという選択肢は浮かばず、結局石の階段を下りることにした。

1－(1) 報恩神社（後書き）

お読み頂きありがとうございます。仙國です。私はもう一本ドファンタジーを書いていますですがこういったものも好きなので書かせて頂いております。この作品には本当にファンタジー要素はありません。それでも良ければ楽しんで下さい・・・もとい悲しんで下さい。誤字・脱字などありましたらご報告下さい。また、どのようであれど感想をお持ちしておりますので時間に余裕がある方はぜひともよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2188y/>

傷迷子とただの少年

2011年11月4日21時10分発行